



自衛するストックホルムの日本人高齢者たち

レグランド つかぐち 塚口 としこ 淑子

ノルディック出版代表

スウェーデンには、1960年代から日本人が移り住みはじめた。60年代の半ば、ビジネスと留学以外でも海外渡航が可能となり、若者たちは当時、外貨持出し最高額であった500ドルを握りしめて、シベリア鉄道や南回りのフランス郵船に乗り、ヨーロッパに繰り出した。日本が戦禍から立ち直り、好景気時代に突入した頃だ。ビートルズが一世を風靡し、未来はバラ色で、世の中に出来ないことなんて何もないと感じられる、たぐい稀な時代だったのではあるまいか。

小田実がフルブライト留学生としてアメリカに滞在後、帰路あちこちを旅行した記録、『何でも見てやろう』（河出書房新社 1961年）に触発されて日本を飛び出した人はごまんといえるだろう。また、五木寛之が、スウェーデンなどでの日本人若者の生態を多く作品にしたので、これに刺激を受けた人も多い。

旅行に出てそのまま留まった人、お手伝いとしてスウェーデン家族と一緒に渡瑞した人、日本料理店従業員募集に応募した人、夫の国に来た人など理由は様々だが、それから月日がたち、それらの人の多くがいま定年を迎えている。

統計によると、ストックホルム・レーン（県に相当）に在住の65歳以上の日本人は181人で、日本人総数1,310人の約14パーセントに当たる。最

高年齢は95歳である。なお、スウェーデン全体での日本人総数は2,394人で、うち65歳以上は338人である。つまり、65歳以上の半数以上がストックホルムに在住しているということになる¹。

スウェーデン在住の外国出身者は、全人口937万人の14パーセント近くで、総数としては130万人弱となる。その中の日本人数はほんの一握りにもならない、かなりマイナーな存在である。

日本人高齢者の中には、家族を持つ人もいるが、独身、あるいは寡婦（寡夫）も多い。ともあれ、この国では国籍を問わず、定年（65歳の誕生日のある月から）になれば年金の支給があるので、生活の心配はない。しかし、別に日本人に限ったことではないのだが、人は加齢につれ人生の新しい局面に遭遇する。心身に支障をきたしたりするし、人との交流が少なくなり、ひとりでの時間が長くなると、淋しさと心細さが増してくる。

立ち上がったシルバー会

そのような状況も含めて、ストックホルム在住の日本人が「シルバ - 会」という組織を立ち上げた。2004年のことで、発足当時の会員数は20人であった。会を立ち上げる原動力となり、初代の会長を務めたYさんは、詳しいことは聞いていない

1. 統計でいう日本人は、出生国が日本という定義である。日本国籍であっても、日本以外の国で生まれたものはこの統計に含まれない。



シルバー会：ホームページ <http://silverkai.freehosting.com>

が、自分自身が大病をした時の経験から、他の日本人をこのような目にあわせたくないと思い、日本人同士が助け合う必要性を強く感じたという。

それからストックホルム市と掛け合って日本人高齢者福祉のための助成金を獲得した。活動資金を得たことにより、交通の便利な近郊に会場を確保することができた。台所付きで部屋が3つあり、日本語の書物やビデオがプールされ、インターネットに接続されている。

現在、家族も含む会員数は120人に増えている。会員の年齢は様々で、40歳から90歳代と幅広い。日常の活動は、Yさんたちが最初に意図したように、在住日本人の援助を第一としている。やはり、言葉が大きな問題なので、行政からの書類を読む助けをしたり、銀行などに同行したりする。それに、SOS用の電話も用意されており、いつでも受け応えができる態勢が整えられている。

また、うつ病に罹る人も少なくなく、その人たちには定期的に電話をして、安否を確かめる。会からの電話を心待ちにしている人も多い。これらの活動は全部ボランティアだ。

じつは、この会で行っているようなことは、スウェーデンでは、ごく一般的な公共高齢者福祉サービスに含まれている。大きな移民グループでは、本国語によるケアも受けられる。ただ、日本語のようなマイナーな言葉での対応は難しいため、助成金を出すことにより日本人組織の自主管理にま

かせているわけである。

会の第二の活動は、会員同士の交流である。私も会の行事に何回か参加したが、そこに居合わせる人たちのお互いに対する態度に、限らない暖か味を感じる。それに、外国の日本人社会にありがちな、そこにいない人の悪口を言う、派閥をつくっていがみ合うなどの陰険さが見られない。

同じ船に乗り合わせているという自覚は、人を思慮深くする。その中で、信頼できる人間関係をつくり上げていこうとするのは、むしろ当然のことなのではないか。

ひとは家族を持たなくても、幾つになっても親しい人間関係を築いていく動物なのだと思う。言い方を変えれば、別に家族がいなくてもそれなりに老後を過ごせるのだ。

ただし、これから高齢化が進みケアニーズなどが生じる場合、どこまでシルバー会がボランティアベースで対応できるか、ということが懸案となろう。言葉が不自由な本人に代わり、日本語のできるヘルパーを会が要請するというのも一案だろう。自分のニーズにあった福祉を提供してもらうには、子どもなどの家族が交渉するのがふつうであるが、シルバー会はその点、自主的にみんなで作る家族的集団なのである。

ポスト核家族のあとに来るのは、一種の運命共同体としての新大家族時代ではあるまいか。ゆるやかに連帯する共生の時代の到来である。